



岩手県立  
盛岡第三高校

教科指導改革

◎「随処為主（付和雷同せず、主体性をもって生きる）」「鴻鵠之志（向上一路の精神で理想を追い求める）」が校訓。2011年度にSSHの指定校となり、「科学的探究力、発展的対話力、論理的思考力」の育成を目指す。

設立	1963(昭和38)年
形態	全日制／普通科／共学
生徒数	1・2年生約280人、3年生約310人
12年度入試合格実績(現浪計)	国公立大は、北海道大3人、弘前大17人、岩手大84人、東北大37人、筑波大8人、東京工業大1人、大阪大1人、岩手県立大19人など233人が合格。私立大は、岩手医科大、青山学院大、中央大、法政大、明治大、立教大、早稲田大、立命館大などに延べ118人が合格。
住所	〒020-0114 岩手県盛岡市高松4-17-16
電話	019-661-1735
Web Site	<a href="http://www2.iwate-ed.jp/mo3-h/">http://www2.iwate-ed.jp/mo3-h/</a>

# 知識偏重から脱却し 考えさせる授業で 真の学力を育てる

## 変革のステップ

### 背景

◎膨大な課題や課外学習によって生徒が疲弊。未履修問題によって高校教育のあり方を再考させられた

STEP 1

### 実践

◎課題や課外学習を精選。「授業第一主義」を掲げ、生徒同士が考えを述べてかわり合う「参加型授業」を導入

STEP 2

### 成果

◎自ら考え表現する力と共に、進学実績が向上。生徒や校内が明るくなる。地域からの期待が高まり中学生の見学者も増加

STEP 3

## 量に頼った指導による 生徒の疲弊が顕在化

岩手県立盛岡第三高校は、例年2000人余りが国公立大に合格する県内有数の進学校だ。過去、その進学実績を支えてきたのは、大量の課題や課外学習といった物量作戦ともいえる指導体制だった。しかし、それは、生徒の疲弊を伴うものであった。部活動も活発であり、生徒は深夜まで課題に取り組んで寝不足で登校するのが常だった。授業中の居眠りに、教師は目をつぶらざるを得ない状況だった。

そうした同校が抜本的な学校改革に取り組み契機となったのは、2006年に起きた、いわゆる未履修問題だ。この問題に直面したことで高校教育のあるべき姿の再考を迫られ、授業そのもので学力を付ける指導に転換する方針を固めた。佐々木修一校長はこのように説明する。

「従前の指導体制を引き継ぎ、授業も教え込みが中心で、教師にも生徒にも知識量イコール学力という意識があったのは否めません。しかし、我々が育てたいのは、次世代のリーダーとして活躍するような生徒だと、学校全体で確認しました。リーダーに必要なのは、高い志を持ち、自ら考え、それを周りに伝えられるような力です。そのために、授業を通して考える力や言葉にする力、ひいては『生きる力』を育てる必要性を感じました」

07年に全国各地の高校を視察し、自校に合った内容を検討。08年に改革の中心を担う経営企画課を立ち上げ、「三高改革」をスタートさせた。

## 課題を精選し 授業で勝負する指導に転換

まず着手したのが、課題や課外学習のスリム化だ。副校長の小笠原健一郎先生はこう話す。

「それまでは、生徒が必死に取り組んでも終わるか終わらないかというくらいの量の課



岩手県立盛岡第三高校校長  
**佐々木 修一** ささき・しゅういち  
教職歴36年。同校に赴任して1年目。「さわやかに主張し、しなやかに従う」をモットーに、組織として生徒の指導に当たりたい。



岩手県立盛岡第三高校副校長  
**小笠原健一郎** おがさわら・けんいちろう  
教職歴29年。同校に赴任して3年目。「人間のトータルな能力は変わらない。先生方がそれぞれの担当で最大限の力を出せるように支援したい」



岩手県立盛岡第三高校  
**鈴木 徹** すずき・ととおる  
教職歴28年。同校に赴任して8年目。経営企画課主任。「改革に終わりは無い。日々、そして授業ごとに改善する気持ちを大切にしたい」



岩手県立盛岡第三高校  
**継枝 斉** つぐえだ・ひとし  
教職歴25年。同校に赴任して8年目。進路指導主任。「この方法で正しいのか」と常に疑問を持ちながら日々の指導を実践していきたい」

題を出していました。学習時間が学力に比例するという考えや、そうしなければ生徒は学習しないのではないかという不安が、どこかにあったのだと思います。しかし、授業そのもので学力を付けていくという本来の姿に立ち返り、課題は最低限の量に精選し、生徒の自主性を尊重した家庭学習の重要性を伝えるようにしました」

授業の充実のために、朝の課外学習を取りやめた上で、1日のコマ数は7コマと変えずに、1コマを45分から50分にした。授業方法も抜本的な変革を図り、生徒が能動的になる「参加型授業」を目指した。経営企画課主任の鈴木徹先生は次のように説明する。

「授業中、生徒が単に教師の話聞くだけの『観客』ではなく、主体的に参加する『プレイヤー』となることで、私たちが求めている力、すなわち思考力や表現力が育つと考えました。全ての教科でこの考え方を原点とし、授業をつくり直していきましました」

理想としているのは、生徒が互いにかかわり合う授業だ。ペアやグループによる学習活動、ディベート、ゲーム的な学習などが多く取り入れられ、「なぜ?」という教師の問い掛けに隣同士で活発に意見を交換し、発表する姿が自然に見られる。進路指導主任の継枝斉先生は、担当する数学の授業をこう変えたという。

「以前は、1コマで4、5問の問題を急がす

ように解かせていましたが、1、2問の良問に絞って丁寧に説明し、生徒同士が考え合う時間を確保するようにしました。こうした指導で理解を深めさせると、自然と『他の問題も解きたい』という気持ちが生まれて自主学習に結び付きます。じっくりと進めるようになってから、つまり生徒が激減しました」

家庭で取り組む課題を減らした分、定着するための学習はどのように補っているのか。

「例えば、9問の問題を書いたプリントを渡し、全てを9分間で解くように伝えます。良問に絞り、生徒に集中して解かせることで定着度が高まりますし、大学入試でも求められる、限られた時間で解を導くスピードも養えます。これまでの終わりが見えない課題に比べ、生徒は前向きな気持ちで取り組めるようになります。生徒が解きたくなくなるような課題を出すことも心掛けています」(継枝先生)

## 授業改革の成果を センター試験で検証

こうした授業方法の転換に、生徒は戸惑わなかったと鈴木先生は言う。

「私たちは、この地域の生徒はおとなしくて自分の考えを発信するのが苦手だと思込んでいました。そうした意識が、教え込みの授業スタイルを助長していた面もあります。

ところが、参加型授業に変えると、私たちが驚くほど、生徒は積極的にコミュニケーションを取るようになりました。実は、生徒は考えを発信する機会を待っていたのです」

むしろ、指導方法の転換にすぐに踏み切れなかったのは、教師の方だった。教師が知識量を重視しがちな理由を鈴木先生が指摘する。

「ベテラン教師は経験だけでなく蓄積もあるため、結果的に教科書レベルを超えた知識重視の指導しがちで、逆に若手教師は指導力への不安から知識量に頼る教え込みの授業をしがちです」

そこで、地理を担当する鈴木先生は、1つの検証を試みた。同学年を教える日本史と世界史の教師と共に、学習指導要領を改めて読み込んで分析し、科目や単元で「求められる学力」を具体的に把握。知識と共に、思考力・判断力・表現力などを育む重要性を確認し、これらを育むために参加型授業を始めた。その結果、センター試験の得点は大幅に上がった。

「この学年のセンター試験の平均点は、3科目とも目標値を大幅に上回りました。安堵と同時に、指導への自信を深めました。元々、地歴は暗記型教科と捉えられがちです。その地歴で参加型授業により良い結果が出たことは、他の教科にとって大きな衝撃となりました。学習指導要領に進じた『求められる力』を育てることが、受験対応力にも十分つなが

るといふ共通認識が出来ました」（鈴木先生）  
「求められる力」を明確にする授業づくりを、佐々木校長も教師全員に呼び掛けている。

「鈴木先生たちの授業は、育てたい力が明確で、その狙いを達成するために活動が位置付けられています。活動を行うことが目的化しては、本末転倒です。私もほぼ毎日、いろいろな先生の授業を見学し、授業改善のアドバイスをしています」

同校が改革の柱の1つとして導入した「Dプラン」も、生徒の授業参加を促した。これは「総合的な学習の時間」におけるディベートを中心とした学習活動で、「自ら考え、自ら学び、自ら発信」を基本理念とし、情報収集力、思考力、判断力、コミュニケーション能力などの育成を目的としている。ここで培われた力が、教科学習における学び合いにも生かされている。

「Dプランと教科学習が両輪となって、論理的に考えたり、自分の考えを発信したりすることが習慣付いていると感じます。このよう力が付くことで、さまざまな教科で初めて出合う問題にも積極的に取り組めるようになると考えています」（小笠原副校長）

## 教師同士で授業を「気軽に」見合い 授業改善の方法を共有

全校を挙げて改革を推し進める上で重要な役

割を果たしているのは、校内研修における授業公開だ。これまで、同校で教師同士が授業を見合うことはほとんどなかった。しかし、授業改善には授業公開が不可欠と考え、改革の一環として取り入れた。

導入時に留意したのは、無理なく継続でき、かつ教科の壁を超えて学び合える体制をつくることだった。まず、負担軽減のため、指導案ではなく、「授業公開シート」を用意することにした（図）。指導案ほど詳細な流れを書くのではなく、他教科でも指導の観点が分かるように、「関心・意欲等を持たせるための工夫」「思考力・判断力をつけさせるための工夫」など、授業方法の工夫をポイントとして示した。参観者は気付いた点などをコメント欄に記入し、直接、授業者にシートを渡す。「授業を全て見ないでコメントをするのは失礼ではないか」という声もあったが、5分でも10分でも見学することは全く失礼に当たらないと周知して、気軽に見られる雰囲気をつくっている。

「他の先生の授業を見て、『こうすれば生徒の関心を引き出せるのか』など、ハツとすることはよくあります。導入の方法、まとめへの流れなどは、他教科の授業から大いに学んでいます」（継枝先生）

授業者は「少しでも他の先生の参考になる授業をしたい」と思うため、授業改善への意欲も高くなるという。

校内研修用 授業公開シート			
実施日 時間	平成23年11月28日(金)		
授業担当者			
教科・科目	地理B	対象ク	ラス
単元等	人口・食糧問題		
本時の狙いやポイント	日本の人口増加率のかたよりを把握させる。 各地域の抱える人口問題の特色を把握させる。	参観者	コメント
関心・意欲等を持たせるための工夫	データの読み取りおよび作図 身近な例から展開する。	参観者	コメント
思考力・判断力をつけるための工夫	自ら作図した図から、地域的な特色を読み取り、原因を考察させる。 一般例から帰納的に身近な例を類推させる。 身近な例から演繹的に一般法則を求める。 特殊例について、その要因について他者と議論しあう。	参観者	コメント
表現力や技能をつけさせるための工夫	上記で得た内容を言語化し、コミュニケーションさせる。 既習の知識を言語化し、コミュニケーションさせる。 作図	参観者	コメント
基本的な知識等を定着させたり、理解を深めさせるための工夫	教員からの受け取りではなく、他者と相談して回答させる。	参観者	コメント
その他の工夫	教員からの一方通行ではなく、多方向通行を目指す。 用語の暗記ではなく、「活用できる知識」とその定着を求める。	参観者	コメント

※ 参観者はコメントを記入の上、授業者あて直接お渡し願います。授業者の貴重な資料になります。

3年生の地理の授業での記入例。指導法の改善が目的であるため、授業者ではどのような工夫をしているのかを明記し、参観者に見てほしい観点を示している  
\*学校資料をそのまま掲載

## 生徒の学習に向かう姿勢が変わり 進学実績が大きく伸びる

授業公開は年間約30回行う。今後は、授業公開以外にも、例えば「練習問題を解かせている合間に」など、いつでも互いの授業を見せ合える関係を目指している。

改革の成果として、どの教師も口を揃えて言うのは、「学校の雰囲気明るくなった」ことだ。「生徒には時間的にも精神的にも余裕が生まれ、とても明るく、元気にあいさつをするようになりました。『自主性が尊重されてい

る』という責任感や自負心も高まっているようです」（小笠原副校長）

以前は体調不良を訴えて保健室を利用する生徒は少なくなかったが、今ではほとんどいないという変化からも、生徒が健全に過ごしていることがうかがえる。

また、進学実績も伸びている。国公立大合格者数は、08年度の219人から、12年度は233人になり、東北大の合格者も増加の一途をたどっている。

こうした成果を受けて、同校に対する地域の期待は今まで以上に高まっている。12年度の学

1200人もの中学生が、同校を訪れたという。

今後の課題の1つは、生徒の視野を広げ、県外の大学にも目を向けさせることだ。12年度の国公立大合格者のうち84人は岩手大であり、生徒や保護者の地元志向は強い。東京大や京都大など難関大に合格する力や適性を持つ生徒は少なくないと考えており、彼らの力を十分に引き出す進路指導へと変革させる考えだ。その一環として、12年度、教師一人ひとりに東京大の過去問題集を渡した。

「一部の教師だけが東京大に対応するのはなく、学校全体で生徒を支援する体制をつくるのが狙いです。教師がそれぞれ担当教科の10年分の過去問に取り組んで、生徒に東京大について語れるようにすることが第一歩と考えています」（継枝先生）

学校が育てたい生徒像と共に、高校生に本来「求められている力」を改めて確認。授業改善によって、自ら考え表現する力を身に付けさせ、人間的な成長に受験対応力を伴わせる。改革を始めて5年が過ぎたが、今後も、地域の要請に応じて、常に取り組みを改善していく考えだ。更に、県内の高校に同様の指導を広め、県全体の底上げを図りたいという目標も抱いている。

「生徒が生き生きと学んで学力を高められる教育を県内全体で進めていく上で、本校が中核的な役割を担えればと考えています」（佐々木校長）